2008 年度 修了

対人援助職における自己覚知をめぐる一考察
― 社会福祉領域の専門職を中心に ―

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
西村　浪二

対人援助職，なかでも社会福祉専門職における自己覚知の重要性は，ソーシャルワーク理論や専門職養成にかかる多くの文献において説かれている。他の対人援助職よりも社会福祉専門職において自己覚知が重要視されてきたのは，精神分析の影響を強く受けた診断主義の台頭による転移・逆転移をめぐり，1930 年以降からであるといわれている。また，近年では，社会福祉士および介護福祉士法が施行された 1987 年頃から，より重視されてきたという見方もされている。

しかし，重要視されながらも，社会福祉専門職の養成にあたっては，自己覚知がカリキュラムに積極的に取り入れられていない現実がみられている。また，社会福祉実践の現場においても，自己覚知の不十分さによってクライエントとの援助関係構築の困難さや，クライエントの理解に歪みが生じるなどの事例もみられる。

このような現状を踏まえ，本研究では社会福祉領域において自己覚知がどのように捉えられているかを，援助関係構築における 7 原則を示した『ケースワークの原則』や，ソーシャルワーク理論，社会福祉専門職養成のテキストから検証した。その上で，本研究における自己覚知の捉え方と構造を明らかにすることを試みる。

また，自己覚知を深める 10 の手法（エンカウンター・グループ，感受性訓練，交流分析，瞑想，体系化された自己探求，スーパービジョン，記録，エコマップの活用，ロールプレイ，ケーススタディ（事例研究））を社会福祉専門職養成の教育カリキュラムに取り入れていくことを前提に，具体的な実践方法を検証した。その上で，自己覚知の構造に 10 の手法における自己覚知の深まりを重ね合わせて考察を試みた。

一方で，自己覚知は様々な手法を用いるだけではなく，実践の場においても深めることが可能であるとの仮説のもと，実践において自己覚知を深め，広げるという視点でドナルド・ショーンの「反省的実践家」や，世阿弥の稽古学，エイミー・ミンデルの「メタスキル」を通して検証を試みた。

さらには，自己覚知とは福祉領域の対人援助職にのみ重要ではなく，人として関係性の中に生きている私たち一人ひとりが，生涯にわたって自分を理解しようとすることで他者を理解し，他者をも含む社会や世界を理解することにつながることから，誰にとっても欠かすことのできない自己探求の道のりであり，人間形成においても重要な役割を果たすことを明らかにする試みである。